
特別寄稿

田口先生のこと

高桑 進*

とうとう田口先生を送り出す時が来たかというのが実感である。早いもので私が本学に職を得て24年も経過した。ということは田口さんとおつきあいも24年間と言うことになる。早いものである。今までに過ごしてきた田口先生との思い出のいくつかを思い出して紹介し、ご退職の饒としたい。私の思い過ごしや記憶間違いがあるかもしれませんが、その点にご容赦下さい。

私が本学に採用された時は、自然科学教室があり地学担当が桂京造先生、生物学担当が故岩城操先生、そして化学担当が田口弘康先生だった。そこに私がアメリカのミズリー州立大学の研究員(ポストドク)から加わった。この4名で長らく自然科学教室が運営された。当時は社会科学教室に、退職された大國先生、今は龍谷大学に移られた舟橋先生、そして故今津先生がおられてB校舎3階の同じ事務室で、毎日顔を会わせてはお茶を飲んでいたのが懐かしく思い出される。

毎年両教室合同でいろんな所に出かけて親睦を図るのが目的の1泊2日の“遠足”に出かけた。お互いに社会問題や教育問題などについて好きなことを議論できる良い機会だった。名所旧跡を訪ねては大國先生の解説を聞き、つくづく自分は日本の歴史について知らないな、と思ったものである。和気藹々とした雰囲気、意見の違いはあってもお互いにそれぞれの存在を認め合っていた楽しい思い出である。

このころは文学部と家政学部、短期大学部の3学部が合同の教授会が開催されていた。大学全体の問題については全教員が発言をすることができたのである。論客の中には田口、大國両先生が含まれていたことは言うまでもない。お二人とも、全体の教員の意見を反映した鋭い指摘や論を展開されていたことが思い出される。

私の方は、大学院を出てからずっと7年間研究生生活をしていたので、33歳で初めて私立大学の一教員となり判らないことだらけで、田口先生から授業の進め方を始め各種申請書類の書き方等色々と教えていただいた。大変感謝している。特に、組織の中での身の処し方等詳

しく教えていただいたのが印象に残っている。

採用された時には、教育学科の小学校教諭を志望する学生を対象とした「理想教育内容論」という科目があり、化学が田口先生、地学が桂先生で、生物を岩城先生と私の合計4名で担当していた。今は亡き岩城先生からはハエの観察や、琵琶湖のプランクトン採取など、楽しい授業の仕方のコツを色々と教えていただいたのが楽しく思い起こされる。この授業の評価を最後に4名の教員が集まりするのであるが、田口先生はいつも厳格な評価をされていたのが印象に残っている。実は私たちは甘い評価だったので、総合するとちょうど良い評価となるのである。

田口先生は早くから一般教育学会に所属され、大國先生とお二人で長らく一般教育の改革の必要性を訴えられていた。専門教育の下請けでない独立した教養教育の実践である。その願いがかなったのが、平成12年から始まった「総合教育科目」である。文部省の大学設置基準の大綱化に従い、従来の「一般教育科目」に代わるものとして、1) 全学の教員が教養教育に関与し、非常勤は避けること、2) 学生には講義だけでなく演習を課することなど、今までにない理想的な教養教育を目指すものとなった。実は、このような取り組みは他大学ではすでに数年前から実施されていたのだが、本学ではそのような改革が遅れてしまったのだ。それまで一般教育科目は、人文科学、社会科学、自然科学の3分野のそれぞれから2科目選択するという履修となっていたため、今から振り返ると各分野からバランスのとれた履修となっていたといえる。時代は一巡し、今日の大学生の基礎学力の低下と関連して再び基礎教養教育の大切さが議論されているのは印象深い。

その後、田口先生は家政学部食物栄養学科に移られ、食物栄養学科の学生の基礎学力の底上げにも力を尽くされた。また家政学部長もされて、教学の運営にも努力された。ご退職を機会に、大変ご苦労様でした、と申し上げたい。

最後に、田口先生の研究経歴について少し触れておきたい。田口先生は、フグ毒の研究で学士院賞を授与され

た有名な有機化学者である名古屋大学名誉教授の平田義正先生の研究室を出られた後、オーストラリア国立大学で有機窒素化合物の研究で pH. D (博士号) を授与されています。その後、ジョンズ・ホプキンス大学のポストドクを1年されたあと、化学・生化学の分野で世界最高

水準を有しているハーバード大学で、著明な有機化学者の岸義人研究室で研究をされたという素晴らしい経歴をお持ちです。そのような研究経歴の研究者が、京都女子大学の教員をされ私立の女子教育にも30年近く力を注がれて来たことは記憶に留めて置きたいと思います。